【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	鳥取県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	国府町立宮ノ下小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	２	２	１	２	２	１	１２	１９
児童数	４６	３８	４９	４０	４４	５２	１	２７０	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「２１世紀に生きる子どもの基礎・基本を培う教育課程の創造」
－教師と子ども・子どもと子どもをつなぐ教育評価－

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

全学年　国語科
学校として、当該教科に関する研究実績があるため。
全教科の基礎・基本となる教科であると考えるため。

全学年　算数科
学校として、当該教科に関する研究実績があるため。

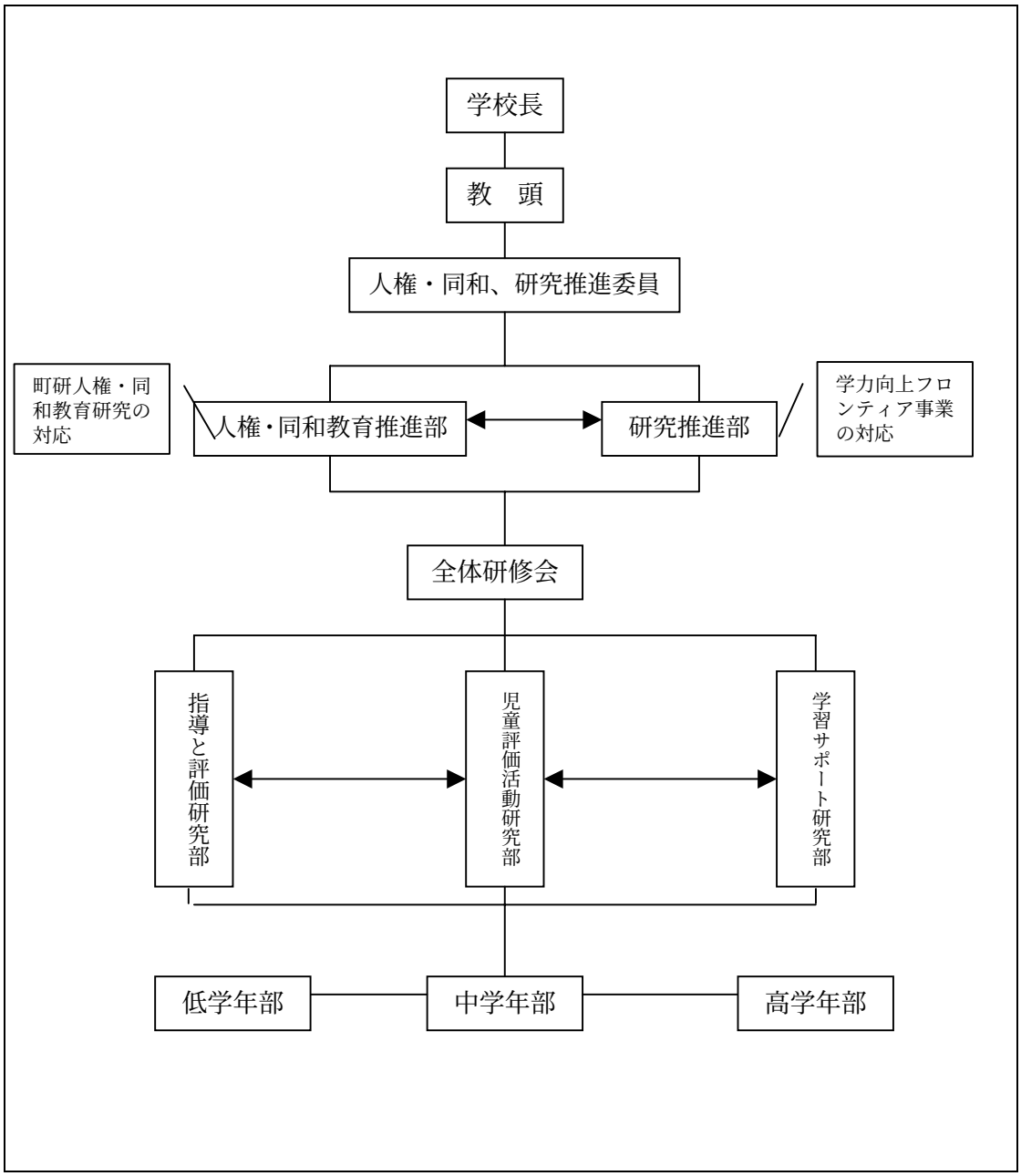
(2)　年次ごとの計画

平成14年度	

平成15年度	○　テーマ　教師と子ども・子どもと子どもをつなぐ教育評価 ○　仮　説　形成的評価が機能する指導と評価の一体化と自己評価活動の取り組みを進めることにより、学ぶ意欲が高まり、基礎・基本の定着につながるだろう。 ○　研究の内容・方法 ・　研究部の組織化（指導と評価、児童評価、学習サポート、学年部） ・　自己評価活動の実践　・指導と評価の一体化の実践 ・　実態把握　・授業研究会と実践者の振り返りの情報発信 ・　個人テーマの設定、実践　・校内個人研究報告会 ・　漢字スキルタイムの実施　・漢字サポートプリントの作成 ・　1年次の研究のまとめ（研究集録の作成）

平成16年度	○　テーマ　教師と子ども・子どもと子どもをつなぐ教育評価 ○　仮　説　・・・・・・・・・ ○　研究の内容・方法 ・　自己評価活動の実践　・指導と評価の一体化の実践 ・　実態把握　・授業研究会と実践者の振り返りの情報発信 ・　個人テーマの設定、実践　・校内個人研究報告会 ・　漢字スキルタイムの実施　・漢字サポートプリント作成 ・　研究のまとめと情報発信

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

【国語】

・自己評価活動に取り組むことで、自分の様子を厳しく見られるようになってきている。自己目標を意識した自己活動を行い、その活動は自己目標を達成できたかどうか振り返る自己評価活動を繰り返す中で育てられてきたものだろう。いわゆる「自分をモニターする」という力へつながると考えられ、よりよい学びの姿の表れでもあると考える。

・グループ活動や発言の仕方などで、全員が参加できるような学習形態を工夫してみた。その結果、挙手発言が得意な児童が進める学習から脱却して、多くの子どもが活躍し考えることができる学習へと改善しつつあると考える。

・教師の願いや単元がもつ価値をもとに作成した単元ノートづくりに取り組んだ。この取り組みにより、児童はことばの一つひとつにこだわった学習を繰り返し行うことができ、豊かな言語活動が保障されるようになってきた。児童は単元ノートを活用することで、教材文が身近になったり、自分で考えたりみんなで考えたりすることができた。それは、単元ノートを作成することを通して、単元で育てたい力や一単位時間でつけたい力を明確にすることができるようになったからである。

・ことばに注目して絵を描いたり、人物の人柄をイメージしたりする取り組みを多く取り入れたことで、想像しながら読むことの楽しさを感じる児童が増えてきている。

・読書指導員と司書教諭が連携を取り、読書意欲を促すための「これだけは読んでおこう」という読書紹介カードを作成した。このカードにより、図書室利用が増加した。また、読書指導員に単元に関連する本を用意してもらい、学習で活用することでことばのイメージを広げたり、理解を深めたりすることができた。特に説明文教材に効果があった。

・漢字スキルタイムを朝の会の後に５分間設定した。大変短い時間ではあるが、学年ごとに工夫して取り組んだ。漢字ファイル・専用ノートなどで、学習成果を蓄積し、振り返りがいつでもできるようにした。学習サポート部を中心に「漢字サポートプリント」を作成し取り組んだ。このプリントは、単に問題を出題するのではなく、まちがいが多かった部分を指摘したり漢字の意味などを教えるコメントが必ず問題の下につけられたりしている。これをもとに、児童は取り組むのでまちがいが少なくなってきている。

・漢字スキルタイムやことばにこだわる学習に取り組むことで、既習の漢字はないか文章を書きながら考えたり、見直したりする意識が高まってきた。

【算数】

・自校作成の児童意識調査の結果を分析すると、多様性の重視、思考の重視、自力解決の重視、表現の重視に伸びが見られる。これは、「あっている」「ちがう」で算数を捉えず、一人で考える授業を重視する教師の熱意がもたらした結果ではないかと考える。

・自己評価活動に取り組むことで、自分の様子を厳しく見られるようになってきている。自己目標を意識した自己活動を行い、その活動は自己目標を達成できたかどうか振り返る自己評価活動を繰り返す中で育てられてきたものだろう。いわゆる「自分をモニターする」という力へつながると考えられ、よりよい学びの姿の表れでもあると考える。

・自己評価を書くときに、その根拠となる活動などが書かれているノートの部分にシールを貼った。この活動をすることで、自己評価に書く文に責任をもつようになってきた。適当に「できた」「できなかった」という振り返りではなく、「～だから・・・だ。」というようになり、「自分をモニターする」という自己評価活動の目的に近づけるのではないかと思う。

２．今後の課題

【国語】
・学習に対する意欲がどうしても高まらない子どもの多くは、書く力と読む力が身についていないことが多い。書く力では、集中して書いたり既習の漢字を活用して書いたりしようとしないことが多い。この状況を改善していくために、視写を多く取り入れていこうと考える。読む力では、漢字が読めないということが読もうとしない原因の一つではないかと考えるので、音読や暗唱活動を強化して読めるようになる喜びを実感させていきたい。いずれにせよ、書ける、読めるといった自信をもたせることが、学習意欲の向上につながるだろうと考える。
・高学年で音読の意識に低下が見られた。これは、書く活動に時間をとられた影響ではないだろうか。読む時間をしっかりと確保し、きちんと声に出して読んだり、暗唱したりしていきたい。また、家庭まかせになっている状況もあるので、学校で読む時間の確保をしなければならない。
・家庭との連携を行い学力の向上を図っていかなければならないだろうが、学校（教室）か家庭という二択では児童の実態に対応しきれない状況がある。だから、学校での学び方の選択肢を増やす努力が必要ではないだろうか。具体的な手立ては模索中であるが、体制の中で可能な方法を考えていこうと思う。
・意識調査の個人分析を行い、できていない児童の原因を突き止めて改善を図るという具体事例から全体の取り組みを模索するということも必要だろう。現状での取り組みの「穴」を見つけ、埋めていくことで確実に学力が向上すると考えるからである。

【算数】
・子どもと子どもをつなぐという観点での算数学習を創造したい。特に、集団解決の練りあいの場面で、友達に説明できたり、わからないことをわからないと言い合えたりできる学習集団づくりをしていきたい。また、学力が向上した子どもの姿とはどういう姿なのかということを、教師が明確にしておかなければならない。例えば、説明が書ける、友達にわかりやすく言える、算数作文が書けるといったような子どもの具体的な姿を明確にしなければならないだろう。
・子どもの学習活動を保障する教材教具の工夫を一層進めていかなければならない。算数部を中心として、教師同士が同僚性を発揮して一つの教具を協同で創り上げるという取り組みを継続していきたい。
・児童の意識調査の結果から、公式を覚えることが大切と考える児童が多いという現実がある。教師の日常の授業に対する意識を変革していかなければ、いくら教材教具を工夫しても児童の意識は変わらない。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

- 月末振り返りプリント（国語、算数）
- 国語意識調査（自作）　算数意識調査（自作）
- 県診断テスト
- AAI

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

＊　県研究発表会（２月９日、１０日）
＊　第１回専門委員会で取り組み状況報告
＊　平成１６年１１月上旬　研究発表会予定

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級
□１３～１８学級　□１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　□少人数指導　□Ｔ．Ｔによる指導
□一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　□算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　有　無